



富山で育つ宿根草の組み合わせとデザイン ～ 33 リアトリス ～

職藝学院

教授 渡邊 美保子

リアトリスは、北アメリカ原産の多年草です。地下にある茎の先端が肥大しているため球根として扱われることもあります。7月になると、垂直に立ち上がった90cmほどの茎に濃い桃色の小花が上から下に向かってゆっくり咲き進みます(写真1)。桃色の糸を緑の棒にぐるぐる巻きつけたような姿は、夏の宿根草ガーデンのアクセントになります。花の色は赤紫、ピンク、白などがあり、草丈の低い品種もあります。

リアトリスは、5月になると茎のまわりに笹に似た細い葉をまとわりつかせながら伸びてきます。6月の初めには、茎の先に松葉のような細い葉に囲まれた白いつぶつぶが現れます。これは、やがて花になるつぼみたちです。上から見るとその不思議な形に吸い込まれそうになります。つぼみをつけた茎は、どんどん伸びて茎にたくさんの緑色の花芽がくっついたような姿で立ち上がってゆきます。

リアトリスの最大の不思議は開花の瞬間です。先端の花芽が赤ワイン色に染まると、中から16個ほどの小さなつぼみがお行儀よく並んでいるのが見えてきます。筒状のつぼみが5つに割れて星のような形に開きますと、中から熟した雄しべの白い花粉が現れます。すぐに、その花粉の中からサクラ色の細長い雌しべが少しだけ顔を出します。雌しべは幅が1ミリ位、透き通るほどの薄さです。雄しべの白い花粉の衣を身にまといながら伸びて、一日で1センチほどの長さになります。そして一枚に見えていた帯状の雌しべがなんと、2枚にぱっくりと分かれ、まるで両手をVの字に広げたような姿になるのです(写真2)。2つに分かれた雌しべは一日ごとにくたびれて、くねくね曲がり、いつのまにか地面に落ちて消えてゆきます。残ったのは



写真2 咲き始めのリアトリス

ラッパ状の小さな小花の集団だけになります。これを上から順番に隣のつぼみに邪魔にならないよう繰り返してゆきます。雌しべが落ちてから2週間ほど過ぎると

花びらが茶色にくすんできますが、次々と順番待ちをしている花芽がふくらんで小花が咲いてゆくので、花の観賞期間は1ヶ月位になります。

リアトリスは日当たりと水はけの良い土壌を好みます。生育条件が良ければ一年ごとに花茎が増えて見栄えが良くなります。組み合わせは、開花期が重なるオミナエシやエキナセアなどを隣に植えると引き立ちます(写真3)。



写真1 リアトリス・スピカータ 7月初旬



写真3 リアトリスの園芸品種(中央)、左はエキナセア、右後方はオミナエシ 8月初旬